

さんしゃ Zapping

Vol. 38 No. 1 (通巻 204号)

2023年7月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

<https://www.ritsumei.ac.jp/gss/research/newsletter/>

[目 次]

< 新任紹介 >

着任のご挨拶	川崎 聡大	p. 2
着任のご挨拶	平井 秀幸	p. 4
着任のご挨拶	藤嶋 陽子	p. 8

< 自著紹介 >

雑感～『神戸市真野地区に学ぶこれからの「地域自治」』 (東信堂) 刊行にあたって	乾 亨	p. 11
---	-----	-------

< 新任紹介 >

着任のご挨拶

かわさき あきひろ
川崎 聡大



四月より人間福祉専攻でお世話になっております川崎聡大と申します。皆様よろしくお願ひ申し上げます。講義は「知的障害の心理・生理・病理」(特別支援教育教員免許に関する講義)を担当させていただいております。北陸・東北を経て15年ぶりに西日本に戻ってまいりました。出身は兵庫県で長らく兵庫・岡山を生活の拠点としていました。前職はいわゆる研究大学院に籍を置いていましたが、元々療育センターや病院での療法士としての勤務し、そこから研

究職へと転身しており、現場に近い位置に帰ってくる事が出来たことをうれしく思っています。現場では療育センター勤務時は知的障害や発達障害をはじめ療育を必要とする児の発達を直接支援する立場に立っておりました。また病院時代は、言語と心理の専門家として幅広く小児から成人まで発達障害から感覚器の障害、さらに脳血管障害や神経変性疾患等による高次脳機能障害や認知症に関する評価や支援に携わってまいりました。療育現場、医療現場を経てその立場を基点に特別支援教育にも携わってきた経緯から、福祉・医療・教育の現場が分かる資質を持った若手の人材育成に残りの人生を捧げたく、社会福祉士の養成、特別支援教育の免許の養成、二つを軸とする本学に赴任させていただきました。

今回、本学にご縁をいただけたことは自分にとって原点回帰であり、粉骨砕身燃え尽きる所存でございます。

また、主たる研究領域は現場臨床

を土台に、幅広く言語やコミュニケーションの障害に関する事をテーマとしています。特別支援教育の対象となる障害や疾患の心理・生理病理に関する事、指導法・評価法の開発やその効果に関する事を取り扱っていました。

成人を対象とした研究では、脳腫瘍摘出時における開頭覚醒下言語野マッピング（手術中に直接大脳皮質をマッピングしてできる限り後遺障害を軽減する方法）に関与していた関係から、周術期の神経心理学的評価に携わっていました。特に生命予後の厳しい患者様と過ごさせていただいた経験から、対人援助職における一瞬一瞬の時間の大切さを身に染みて痛感しました。今を生きる限られた時間をいただいてサービスを提供することの重要性がわかる学生を一人でも多く現場に送り出すお手伝いが出来ればと考えています。

小児を対象とした研究では、限局性学習症の中でもっとも頻度の高いディスレクシアに関するものが多いのですが、読みの困難さそのものに関する解明から、介入することによってその児童・生徒の生活にどう資することができたか、(例えば学習障害であれば)学習を楽しめるようになったか、といった支援のための支援、介入のための介入の否定する形で従属変数をとるようにしています。

昨今、特に発達障害に関しては十分にエビデンスを持たないままニューロダイバーシティの観点と対極に立つような極論で巷を騒がせる状況が続いています。

小児から成人といったライフステージに応じた支援の在り方を深く考えています。今一番、力を入れている研究は、発達障害特性によって生じる困難さのうち、「出来る」と「出来ない」の間にある「頑張らないとできない」状態を目に見える形で数量化しエビデンスとして残すことに力を入れています。

まだまだ、研究も臨床も教育も足りない事ばかりですが、立命館の偉大な先達のご指導をいただき私自身も大きく成長したいと考えています。

最後に繰り返しになりますが、医療・教育・福祉の多職種連携を可能とする、多彩な知識と実践力を有した教育福祉人材の育成を通じて、真のインクルーシブ社会、生涯発達を意識した専門職支援者を一人でも多く世に送り出すことに少しでも寄与できればと考えています。

2006年6月岡山大学大学院医歯学総合研究科修了 博士(医学)、公認心理師、特別支援教育士SV、言語聴覚士、臨床発達心理士。

着任のご挨拶

ひらい ひでゆき
平井 秀幸



2023年4月より、現代社会専攻に着任いたしました、平井秀幸（ひらい・ひでゆき）と申します。今年度は、学部では「基礎演習」、「プロジェクト・スタディ」、「社会文化論」等を、大学院では「資料文献研究（英語）」等を担当させていただいております。

私は、東京都と神奈川県のちょうど境にある町田市・相模原市で幼少期を過ごし、学生時代を池袋、上野、浅草といった「東京の玄関口」で暮らしたあと、カナダの計画首都であ

るオタワ（英語圏とフランス語圏の境界地点に位置します）にてポストドク生活を送りました。その後、南大阪の——といっても奈良県や和歌山県との県境に近いエリアにある——私立大学に12年間ほど在籍し、この春に立命館大学産業社会学部に異動してまいりました。こう書いて自分でもはじめて気がついたのですが、私自身のこれまでの人生は常に、「辺縁」や「境界」といった場所・空間と深くかかわるものであったように思います。私の現在の研究室も、衣笠キャンパスの北西の端（洋洋館）にあります。なんとなく、自分らしくて居心地がよいです。

私の「辺縁」「境界」性は、どうやら自身の専門性にも現れているようです。私はこれまで、薬物使用（者）に対する介入実践／政策の歴史的変化や国際的差異を経験的に研究することを通して、近現代社会の逸脱統治のあり方を批判的に検討・展望する、といった仕事をしてまいりました。研究テーマも対象も大学院入学

時より 20 年以上ほぼ変わっておりません。ところが所属先は「教育学（大学院）」→「法学（ポスドク）」→「社会学（前任校）」と、目まぐるしく変化してきました。どの領域も自分の専門と言えるような気がするし、どれも言えないような気もします。研究室の心地よさとは対照的に、研究や専門性について自己紹介するとなると、とたんに居心地の悪さに襲われます。

専門分野を人から聞かれた際には「犯罪学」と答えることが多いのですが、正直自分でもしっくり来ません。そう思う理由は二つくらいあります。ひとつ目の理由はいたって単純で、端的に自分自身、犯罪研究だけをやっているわけではないという自覚があるからです。ご存知のように、薬物使用者は「犯罪」者として「矯正」処遇を受けたり、「病（依存症）」者として精神科「医療」の対象となったり、「生活困窮」者として「福祉」的支援の受け手に設定されたり、さらには、「自助」によって回復すべき存在として「当事者活動」が期待されることもあります。もちろん、「犯罪」とみなされたうえで（たとえば刑務所のなかで）、精神科医や心理カウンセラーが介入することもありますし、同じ「犯罪」というまなざしでも国によって多様性があることは、昨今の大麻合法化をめぐる国

際的議論を見ても明らかでしょう。

「あらゆる政策のなかで、薬物政策ほど国・地域ごとのばらつきが大きい政策はない」と言われることもあるほどです。確かに薬物使用は日本では「犯罪」というイメージが強いので、薬物研究＝犯罪研究と思われがちなのですが、矯正処遇も精神科医療もソーシャルワークも心理療法もセルフヘルプ・グループも研究対象としてきた私としては、自分の専門性を「犯罪」にのみ結びつける「犯罪学」というアイデンティティには少なからず違和感があります。

そうはいっても、私の研究業績のなかには犯罪や刑事司法に関連したものが多くも事実です。これまでに取り組んできた刑務所や少年院でのフィールドワーク、施設出所後のコミュニティにおける犯罪者の「立ち直り」の研究などは、「犯罪学」の伝統的な研究テーマのひとつといって間違いありません。しかし、それでもやはり私には自分の専門を「犯罪学」と言いたくない気持ちがあります。「犯罪学」という学問には固有の党派性があること、それにもかかわらず「犯罪学」研究者はその党派性をほぼ顧みずに／問われずに済んでいること、に強い疑問を感じるからです（これがふたつ目の理由です）。

「犯罪学」の党派性に気づくため

には、「犯罪」概念の党派性に思いをはせるのにしくはないと思います。犯罪学者が研究対象とする「犯罪」は、ほぼすべての場合合法的な概念(刑事法に違反する行為)であることが自明視されています。つまり、街頭で発生する「窃盗」や「殺人」は(刑事法犯であるがゆえに)犯罪学の対象となりますが、「企業が授業のある平日に就活イベントを実施し学生に出席を求めること」や「一国の大統領が『ならず者国家』の国民の大量殺戮を高い蓋然性で招来する『正義の戦争』を命じること」は(刑事法犯ではないがゆえに)めったに犯罪学の対象とはならないのです。平日の就活イベントは学生(保護者)が支払っている教育費を企業が不当に詐取する行為にも見えますが、その研究は犯罪学ではなく、「正義の戦争」はどんな連続殺人事件より多くの人の死をもたらしますが、その研究は犯罪学とはみなされません。ことほどさように、犯罪学は同じ「何かを盗む」「誰かを殺す」といった加害行為であっても、権力弱者(the powerless)のそれを選択的にとりあげ、権力強者(the powerful)のそれを相対的に見逃すような偏り——党派性を有する傾向があります。

むろん、いかなる党派性からも自由な学問的視角は存立困難ですから、重要なのは党派性の有無ではなく、

党派性の内容ということになります。私が現在積極的にかかわっているのは、犯罪学が有するいわば「権力強者による加害行為を放免・隠蔽する政治的プロジェクト」としての党派性を批判し、刑事法犯としての「犯罪」を創り出していく(犯罪学や刑事司法を含む)権力強者側の暴力性それ自体を研究対象とする「批判的犯罪学」と呼ばれる立場です。また、「犯罪学」という名称や「犯罪」という概念それ自体から距離を置き、環境破壊、ジェノサイド、移民・難民・捕虜等への人権侵害、政治汚職等のさまざまな社会的ハーム(harm)を研究しようとする「社会的ハームアプローチ」「ゼミオロジー(ギリシャ語で『ハーム』を意味する *Zemia* に由来しています)」と呼ばれる領域とも交流を続けています。

こうした関心に基づいて研究しようとするときに避けて通れないのが、権力強者を直接の対象とするような社会調査です。従来の社会学は、特に質的なアプローチにおいて、権力弱者の声や生活経験を書きとめるなかで構造的暴力の問題を問いに付すような批判的研究を得意としてきました。しかし、権力強者への批判的社会調査はそうした研究とは別種の困難性にみまわれます。学術コミュニティが長い時間をかけて培ってきた「調査倫理」も効果を発揮しない

かもしれません。むろん、調査対象と誠実に向き合い、調査目的や関心を丁寧に説明したうえで、インフォームド・コンセントとラポールに基づきながら調査を進め、刊行前には草稿のチェックを受ける——こうした作業の重要性は強調してもし過ぎることはありません。しかしながら、権力強者の実践や生活世界に身を置いてその暴力性を問いに付そうとするような社会調査を想定すると、それがはたして「現実的」な調査の進め方なのか、もっと言えば、それは本当に調査者として「倫理的」な振舞いといえるのか、容易に答えは出せないでしょう(あくまで例ですが、「当該政治家との緊密なラポールのもとで実施される汚職調査」などを想像すると、滑稽というか、おぞましい感じがします)。現在私は、このような「批判的社会調査の可能性・困難性」をめぐる問題系にも関心を持っています。

先述のように、私の研究対象である薬物使用は、伝統的なものから現代的なものまで(刑事司法、医療、福祉からセルフヘルプ・グループや「当事者研究」まで!)、近現代社会における逸脱統治をかなり網羅的に観察できる稀有な形象です。「辺縁」「境界」性の高いマイナーな対象ではあるのですが、一步引いた地点から「中核」「中心」部を見渡すことのできる「戦略的高地」となるかもしれません。やや自己肯定し過ぎな気もしますが(笑)、そのくらいの気持ちで今後も「辺縁」系「境界」人として頑張りたいと思います。

先生方、職員の皆様方にご助力いただきながら、歴史と伝統ある産業社会学部の一員として、微力ながら精一杯励みたいと存じます。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

着任のご挨拶

ふじしま ようこ
藤嶋 陽子



2021年4月よりメディア社会専攻に着任しました、藤嶋陽子（ふじしま・ようこ）と申します。授業は「広告文化論」のほか、今年度は「基礎演習」、「プロジェクト・スタディ」を担当します。生まれは山梨県甲府市で、大学進学以降は東京を拠点としていました。今回、初めての関西圏での暮らしとなるので、新たな環境を楽しみにしておりました。先生方、職員の皆さまに温かく迎えていただき、心より感謝しております。

私自身の専門は文化社会学、ファ

ッション研究で、特にファッションメディアの性質やコミュニケーションのあり方を研究しております。大学院ではミュージアムやポップアップイベントなどの空間メディアを中心の対象としており、その後はECサイトやSNSといったデジタルメディアを主な対象としています。根本の関心は、マーケットにおけるモノの価値をめぐるシステム、消費への欲望を喚起する仕掛けにあります。ファッションはすごく好きだという人もいれば、関心がないという人や苦手意識のある人も多いトピックです。それでも人間は誰しも衣服を着ていて、身体をめぐる多様な問いに開かれた対象だと考えています。

せっかくこのよう執筆の機会をいただいたので、自己紹介を兼ねて、ファッションというトピックに関心をもったきっかけから、今日までの活動について書かせていただきます。思えば、私は幼少期からファッションというものに特別な思い出がありました。それはファッションの楽

しさに魅了されたというような明るいものではなく、漠然と自分の凡庸さに不安を持って、派手な格好をして人目を引こうとし、ロリータやヒップホップ、パンクスといった“特殊な”ファッションを身に纏うことで固有のアイデンティティを示そうという試行錯誤でした。予備校時代には紫色の髪に左右異なる靴下を履き、ド派手なピンクのワンピースで地元のストリートスナップに掲載されており、大学入学してすぐはピンクと紫のツートンヘアで前髪は黄緑、全身柄物という気合いの入ったスタイルだったことを覚えています。

そこからファッションデザイナーになることを目標に学部時代は作品制作に明け暮れ、徹夜で縫いものをする毎日でした。学業の方ではシュルレアリスムに関心を持っていたことからフランス文学科に進みました。そして卒業後には念願叶い、ロンドンの芸術大学で改めてデザインの勉強をしていました。夢と希望に満ち溢れた留学でしたが、実際には商業的なサイクルでデザインをしていくことが頭でっかちに創作しようとしてしまう自分にはなかなか難しく、デザイナーの道を諦めることを決めて帰国しました。その挫折の大きな要因でもあった、ファッション業界特有の強固なポリティクスや価値システムを理解したいと大学院へと進

みました。ファッションの研究をしているということ、おしゃれが好きだから、好きなデザイナーがいるからと思われがちなのですが、私の場合はむしろ逆で、ファッションというものに翻弄されつづけた先での、ある種の執着のような選択なのかもしれません。

大学院進学後のファーストキャリアは、アパレル EC サイトの運営会社でのリサーチサイエンティスト職でした。EC サイトのファッションを対象とした研究職の募集でしたが、人文社会学は射程にないものであったので、Twitter で「文系の研究者も雇ってほしい」と呟いて連絡をいただいていたの参入でした。今でこそ自分のキャリア形成の土台となった貴重な経験であったと思いますが、当時の私は大学への就職を思い描いていたため、民間企業に入るという決断には不安が大きかったことを覚えています。この IT 企業では情報工学の研究者中心の研究部門で数ヶ月過ごし、組織変更の激動で新規事業開発の部署に移動、産学連携の共同研究を行うチームに所属していました。そのなかでも、こういった研究や自社の推進する“ファッションテック”という領域の認知拡大、価値の発信という役割を担い、オウンドメディアの編集長としてサイトの設計からコンテンツ制作、運用まで担当してい

ました。

ですが、アパレルビジネスに実際に携わり、またビッグデータ活用や企業における研究開発に携わるなかで、ファッションというビジネスの抱える持続可能性の問題の大きさ、そして難しさを改めて実感することにもなりました。特に、ファッションは人間の欲望が如実に表出する領域です。必要性以上につくりつづけ、買いつづけることで成り立っている産業です。また、食べもののように自分で消化することもできず、使用年限は長いため、手放す方法まで考えなくてはなりません。ですが、だからといってファッションが積み重ねてきた豊かな文化や消費の楽しみを否定することもできません。これはファッション好きだけでなく、あらゆる人にとって、自分の楽しさや豊かさと社会の関係を考えることに

なる重要な問題だと思っています。

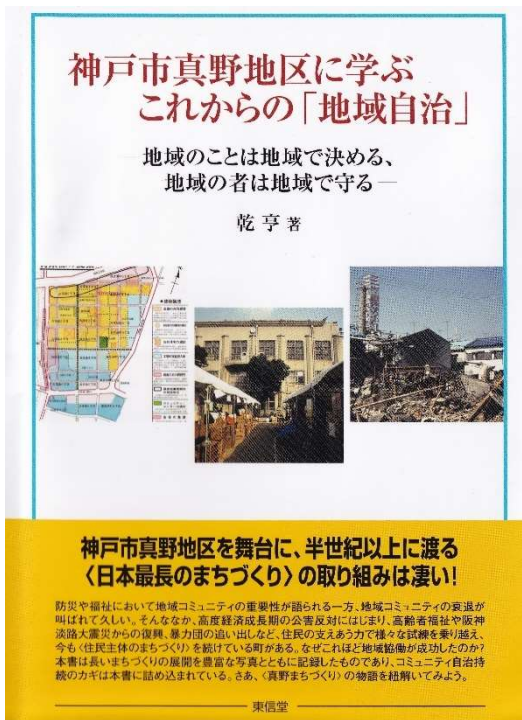
私自身は研究を通じて、こうした現代の消費文化の大きな問題と向き合いつづけていきたいと思っています。また、実践まで含めた多様な議論を展開していくため、現在は衣服の生産時に残布の廃棄を3DCGや人工知能を用いて最小化する技術の開発や、仮想空間上でのファッションを推進する大学発ベンチャー企業と協同した試みにも携わっています。

まだまだ短いながら紆余曲折しながらファッションという対象と付き合い合ってきましたが、こういった経験を少しでも活かしながら消費文化をめぐる研究を一層進めていくと同時に、学生のみなさんと探求していきたいと思います。精一杯頑張りますので、今度とも何卒、よろしく願いいたします。

< 自著紹介 >

雑感～『神戸市真野地区に学ぶこれからの「地域自治」』
(東信堂) 刊行にあたって

乾 亨



神戸市の長田区、JR神戸線の兵庫駅と長田駅の真ん中付近を海側に下がり国道2号線を越えたあたり、兵庫運河と新湊川に囲まれた一角に「真野地区」と呼ばれる町があります。たった39ha程度の一小学区区ですが、この町は、高度経済成長期の公害反対にはじまり、高齢者福祉

って考えた「真野はどうやって真野になったのか?」「真野の住民主体とはなにか?」についての論考、そして第3部が、2018年に開催した〈真野まちづくり連続フォーラム〉(真野地区まちづくり推進会主催)の全記録です。とりわけこの第3部は、真野に関わってきた多くの学識者を真野に招き、地域住民と一緒に「真野まちづくり」を多面的・包括的に議論した講演・シンポの記録で、たぶん二度とは聞けない、文字通り空前絶後の、貴重な資料だと密かに自負しています。

では、いま(古典的な…時代遅れの?)「真野まちづくり」を語る意味はどこにあるのか?(単なる乾の思い出話ではないのか?)…たしかに〈真野まちづくり〉は神戸の下町の小さな地域で展開されてきた個別事例にすぎません。しかし、そこで試みられてきた、「地域の人々を支える・地域で支えあう(弱いものを支えながら共に生きる)」ための様々な地域活動、共に生きるために「地域の住環境を主体的に改善していこう」とする様々な取り組みの物語、そして、その基底に流れる地域を支える想いや理屈、その想いを活かし継続的な活動を可能にする仕組みは、今なお、というより、今こそ、他の多くの地域にとって大いに参考になる

ものだと考えています。しかも、57年余にわたって住民主体のまちづくり(自治的地域運営)を継続的に行ってきた地域はほかに類をみないとするれば、「真野まちづくり」を語ることはそのまま、住民主体のまちづくりの可能性とそのための要件を語ることになるはずだと考えています。

とりわけ近年、高齢社会の進行と経済の停滞のなか、国も多くの自治体も財政的にひっ迫し、「自己責任」を標榜する新自由主義の影響のもと、大きな「公共」(セーフティネット)があてにならなくなりつつあるいま、多くの人々は意識的にあるいは無意識のうちに、「コミュニティ(つながり)」という小さなセーフティネットを求め始めているように思われます(「近隣関係の希薄化」という現象とは裏腹に)。だとすれば、真野地区が試みてきた「人の関係性の編目づくり」を基盤としたまちづくりのプロセスは、どこの地域でも取り組みうる(取り組まなければならない)ひとつのモデル(希望の物語)なのではないかと考えています。

以下、余談です。今だから白状しますが…小生はあまり真面目な研究者ではありませんでした。「事実を観察して研究としてまとめるよりも、まちづくりの現場で住民と一緒に事実を創りだすことのほうが面白い

(大事だ)」などと、まことしやかな「言い訳」(?笑)をしつつ、「研究」や「公的助成の応募」はその筋から叱責を受けない程度で済ませ、教員生活の多くの時間を、ゼミ生たちと共にいろいろな地域で、住民の人達と「遊んで」いました。なので、結構長い教員生活のなかで、依頼を受けて冊子原稿を書いたり、誘われて書籍の何章かを分担執筆することはあっても、自分で率先して本を書き上げようと思ったことはありませんでした。でも…そんな根っからの無精者の小生ですが、自分が寄って立つ思想的基盤(というより、行動原理・構え方)の形成に大きな影響を与えた2つの実践事例だけは、経験を共有した住民達へのお礼の意味も込めて、そこで得た知見をきちんとまとめてお返ししなければ、とずっと気にしてきました(意外と気にしい…いや、義理堅いやつなんです…笑)。そのうちの1つは、コーポラティブハウスの金字塔と言われる「ユーコート」(運動の立ち上げから竣工まで深く関わりました)。で、こちらは11年前、恩師の故・延藤安弘先生と一緒に「マンションを故郷にしたユーコート物語」(昭和堂・2012)を出版できて一安心(手前味噌ですが

…2012年の日本生活学会「今和次郎賞」他を受賞)。そして残る1つが、他ならぬこの「真野まちづくり」…特任4年目という、教員生活の徳俵に足が掛かった段階で長年の宿題を提出できて、ようやくホッとしている今日この頃です。

最後になりましたが、2022年度産社学会学術図書出版助成をいただき、本当に有難うございました。執筆者としては「真野だけ」を論じるのではなく、「真野から」これからの自治を論じているつもりではありますが…タイトルに「真野地区」と明示され、どう考えても売れそうもない本書が日の目を見ることができたのは…出版社の英断?のおかげもありますが…なにによりも、産社学会の皆さんの理解と支援の賜物と深く感謝しています。…なにせ、特任になった時点で一旦学会を辞めたのに、助成申請のために再度加入したわけですから(あっ、信義上、23年度も継続して学会費は納入させていただきました…笑)。というわけで、学会助成のおかげで積年の課題を果たす事ができました。あらためてお礼を申し上げるとともに、産社学会の更なる発展を祈念しつつ筆を置きます。

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告など教育・研究に関するあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろいろな特集も組んでいきたいと思っています。

何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。

形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付してください。

